

Hamamatsu Museum of Musical Instruments 浜松市楽器博物館だより

No. 19
2000. 3. 30

楽器博物館 5周年記念事業第 1弾!!

特別展「メキシコ・グアテマラ楽器紀行」まもなく開催

期 間：平成 12年 3月 25日(土) ~ 5月 7日(日)

場 所：浜松市楽器博物館地下 1 階第 3 展示室

観覧料：大人 600 円、中人 300 円、小人 150 円 (常設展観覧料含む)

メキシコ・グアテマラの地域は、古くからマヤ、アステカに代表される高度な文化が栄え、今でも先住民の間には昔から伝えられた楽器が多く残っています。また、16世紀以降のヨーロッパもしくはアフリカの文化との接触により、多様な混合文化が生まれ、音楽や楽器についてもユニークな形態が数多く生まれました。今回の特別展では、平成10年度の調査時に収集した楽器資料を中心に、収録ビデオや写真、民族衣装等を交え、次の3つの展示ゾーンにより、楽器や音楽を紹介します。

■ メキシコゾーン



マリアッチの演奏風景

スペイン人が初めて今のメキシコがある地に足を踏み入れた16世紀頃、この地にはアステカ文明が栄えていました。当時のスペイン人の記述や出土品によれば、当時先住民が使っていた楽器は、テポナストリ(割れ目太鼓)、アヨートル(亀の甲羅)、アヨヨテ(木の実で作ったガラガラ)、ウエウエトル(3本脚の太鼓)、シルパート(土笛、リコーダー、オカリナの仲間)などがあります。今のところ弦楽器があったという証拠は見つかっていません。

スペインによる征服以降は、ヨーロッパの音楽が宗教劇や征服劇などを通して先住民に広まってきました。18世紀頃までには、現在のメキシコ民俗音楽の代表的な形式「ソン(son:スペインの地方舞踊がメキシコに土着した音楽)」の原型ができあがります。この時期までにヨーロッパの弦楽器が民俗音楽に取り入れられ、ピウエラ、ギターロン、シンコ(ギターの仲間)などや、アルパ(ハープの仲間)は、現在ではメキシコ民俗音楽にはかかせない楽器となりました。

■ グアテマラゾーン



マリンバの演奏風景

現在のグアテマラの地は、紀元前からマヤ文明が栄えていました。楽器については、出土品、遺跡に見られる壁画、絵文書等から、先住民が今でも儀礼の際に使用するほら貝やトランペットの仲間、リコーダーの仲間などの楽器があったことがわかっています。

マリンバは、グアテマラの象徴として、広く国民に愛されている楽器ですが、その原型は、17世紀スペインによる征服時に、アフリカから連れてこられた奴隷たちが取り込んだといわれています。アフリカにマリンバという名称があること、ピリピリとした音を出すための仕掛けが、共鳴体に施されている点が共通していることなどが、この定説の根拠となっています。17~18世紀にかけて先住民に広まり、ひょうたんを共鳴体にしたマリンバ・デ・テコマテスが、祭りや宗教行事でよく使われるようになりました。19世紀末には半音階の音板が加えられ、より大型化したマリンバが登場し、さまざまなジャンルの音楽を演奏することが可能となりました。現在のグアテマラ民俗音楽は隣国メキシコの影響を受け、メキシコ風の音楽がマリンバ・バンドによって演奏されています。

■ ラテンアメリカゾーン

メキシコ・グアテマラ以外のラテンアメリカの国々でも、先住民の文化とヨーロッパやアフリカ文化とが融合して、新しい音楽文化が生まれました。このコーナーでは、楽器や音楽が伝わった様子、近隣諸国に与えた影響などを所蔵楽器の紹介を交え解説します。

■ 講演会「中米音楽事情」

講師：濱田滋郎 (スペイン・中南米音楽研究家)
日時：平成 12年 4月 15日 (土) 14:00 ~ 16:00
会場：アクトシティ浜松研修交流センター
401会議室
*聴講無料 4月 1日 (土) より電話申込受付

■ 「メキシコ民俗舞踊」

出演：山崎ギジェルミーナ (メキシコ民俗舞踊家) ほか
日時：5月 5日 (金) 午前 11:00、午後 2:00
会場：楽器博物館 第 2 展示室
常設展観覧料のみでご覧頂けます。

展示室の声 ～パソコン楽器ミュージアムがオープン～

来館者のみなさんが、世界の楽器や楽器のしくみなどを楽しく知ることができる、「パソコン楽器ミュージアム」がオープンしました。



展示ブースの様子

「パソコン楽器ミュージアム」は、展示室に入るとすぐ右手にあります。パソコンは3台並んでいますが、どのパソコンでも同じものを見ることができます。

席についたら、ガイドのシートを見ながら進んでいきます。最初に自分が見たいコースを選んでもらいます。コースは3つ、「楽器データベース」、「サウンドツアー」、「浜松市楽器博物館ホームページ」に分かれています。では、各コースの様子をのぞいてみましょう。

楽器データベース

「楽器データベース」のコースでは、浜松市楽器博物館に収録されている楽器約1500点の写真、データを見ることができます。また、そのうちの約100点の楽器は音を聴くことができます。

見たい楽器は、楽器の分類、名前、製作者、地域などの条件を使って、効率よく目的の楽器を探し出すことができます。

デジタル処理がされた楽器の写真は、見たい部分を拡大して鮮明な画像で見ることができます。♪マークがついている楽器は音を聞く事もできますよ。



楽器データベース

サウンドツアー

「サウンドツアー」は、管楽器や弦楽器の音が出るしくみや、音色、音量、音の高さを観察するコース「おとのでかたをかかさつしよう」と、世界の楽器（100種類）が出すいろいろな音を聴いたり、その音を使って1分程度の音楽を作ったりすることができるコース「せかいのがっきのおとをきいてみよう」の2つのコースがあります。最初にどちらかのコースを選んで先に進みます（サウンドツアー①）。



サウンドツアー①

「おとのでかたをかかさつしよう」を選んだ後、「管楽器」のコースを選ぶと、サウンドツアー②の画面になります。ここでは、管楽器の音が出るしくみと管の形の組み合わせで、音色や音量がどのように変わるかを観察することができます。また、それぞれの組み合わせがどの楽器に当てはまるかを見ることがもできます。「つづき」を押すと、音量や音の高さを変えるしくみを観察できます。



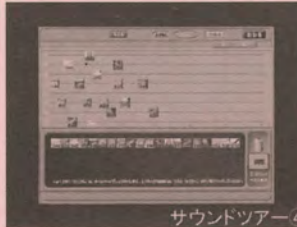
サウンドツアー②

楽器博物館に展示している楽器はすべてとても貴重なものですから、皆さんは残念ながら手にとって音を出すことはできません。でも「せかいのがっきのおとをきいてみよう」では、世界中の珍しい楽器の音を聴くことができます（サウンドツアー③）。この画面の上には、100種類の楽器の写真が所狭しと並んでいます。どれか一つ楽器を選べると、下にその楽器で出すことができるいろいろな音のパターンが並びます。その中から一つを選べると、音を聴くことができます。



サウンドツアー③

この「せかいのがっきのおとをきいてみよう」では、100種類の楽器の音（全部で9000パターン）を使って、自分だけの音楽をつくることもできます。サウンドツアー③の画面で音を聴きながら音楽づくりに使う音のパターンを選びます。選び終わったら次の画面（サウンドツアー④）に進みます。前の画面で選んだ音が下に並んでいますから、一つずつ選んで線の上に並べていきます。自然の音をまぜたり、いろいろな国の楽器の音をまぜたりすると、誰も聴いたことがない新しい音楽が生まれます。ユニークでおもしろい作品は、楽器博物館のホームページで紹介されるかも。



サウンドツアー④

楽器博物館のホームページ

前号でもお知らせしたように、楽器博物館では公式ホームページを開設していますが、パソコン楽器ミュージアムのコンピューターでも、楽器博物館のホームページを見ることができます。

新しく登場した「パソコン楽器ミュージアム」で、今までわからなかった楽器の不思議がわかるはず。楽器博物館に遊びに来たら、ぜひトライしてみてくださいね。(M.M)

研究ノート ～ 19世紀ギター～

最近「19世紀ギター」という言葉を専門紙やCD等によくみかけますが、音楽辞典等で調べてもそのような名はどこにも見当たりません。そのまま解釈すれば「19世紀のギター」となりますが、それは現代のギターとは違うのでしょうか。

この19世紀ギターという楽器、その名の通り19世紀に製作され使われていたギターのことですが、現代のギターとは製作方法・構造・演奏法・音色等が大きく異なり、現代のギターとは違う楽器といえます。言い換えれば19世紀のギターは、当時既に一つの楽器として完成されていたといえ、現代のギターは19世紀のギターを元により大きな音を求めて改良された別種の楽器と考えられます。

この変化は当時の演奏会場、聴衆等の社会状況による影響が大きいのですが、このことはピアノとフォルテピアノ（金属フレームがない、もしくは部分的に使われている主に19世紀に作られたピアノ）の関係に非常に類似しています。ギター同様、現代のピアノとフォルテピアノもその構造・演奏法・音色等が大きく異なり、現在ではそれらが単に古いピアノではなく、現代のピアノとは別の一つの完成された楽器として認知されています。そのためこれらを区別する必要があり、フォルテピアノという名が使われるようになりました。このピアノとフォルテピアノの区別が一般的になったのは、近年の古楽の流行、オリジナル楽器での演奏が注目をあびるようになってからです。ギターにおいても最近になり、その影響が現れ、ピアノと同じくオリジナル楽器による演奏会、CD等が多くなりました。そこでギターも、現代の楽器とそれ以前の楽器の名称による区別が必要となってきました。当初はバロックギターという名称も使われていましたが、これはさらに時代を遡りバロック時代に使われていた複弦のギターを、現代のギターより古いものの代表とした場合の呼称であり、ここで話題にしている19世紀のギターにはこの名は適しません。つまりギターの場合、フォルテピアノのような19世紀の楽器を示す適当な名称が未だないために、そのまま19世紀ギターと呼ばれているのです。

さて現代のギターとこの19世紀ギターの区別ですが、単に製作年で分けることはできません。それはピアノとフォルテピアノが明確に区別できないことと同様であり、地域性と過渡期という時期を考慮する必要があります。しかしある程度の定義は必要なので、ここで現代のギターと19世紀ギターを次のように定義してみたいと思います。

まず現代のギターについては、「スペインのアントニオ・デ・トーレス・フラド (Antonio de Torres Jurado/1817生まれ) がセビーリャの工房において1850年代に作った弦長650-655mm、扇状力木配置の響板をもつ楽器*1と同様のスタイル（規格・製作方法・構造等）で製作されたギター」ということができます。

19世紀ギターは「5コース複弦のバロックギターから6コース単弦への転換を終えた19世紀初頭から、前述のトーレスのギターより以前にヨーロッパで作られていたスタイルのギター」ということができます。ただし現代のギターの原型といえるトーレスのギターのスタイルが、ヨーロッパ全土に広まるには若干時間がかかり、比較的早くそれを取り入れたイギリス（主にルイス・パノルモ一家）以外フランス、ウィーン等では19世紀末まで、19世紀ギターのスタイルで製作されていました。

現在クラシックギターの主なレパートリーになっているソル、ジュリアーニらの作品は、まさにこの19世紀ギターの為に書かれたもので、彼らは私達が手にしている現代のギターを知る由もありません。そんな偉大な作曲家の音楽を本来演奏されるべき楽器で聴くことは大変有意義なものであり、きっと新たな発見があるはずです。19世紀ギターと現代のギターとの具体的な違い、当館所蔵の19世紀ギターの検証等は機会があったらまたご紹介したいと思います。(T.S)

*1 現代のギターの原型ともいえるもの。現存する最古の資料は1854年製、マドリッドのギター製作家ホセ・ラミレス3世所蔵。No.無し。トーレスは1852～69年までの製作第1期には個々の楽器にナンバーを付けておらず、1875～92年の製作第2期よりNo.1を付けている。この楽器は後にホセ・ルイス・ロマンニロスにより便宜的にFE01<FirstEpochの略>という番号がつけられ、知られている。



後：トーレスのスタイルを受け継ぐ現代の
スペインのギター（1998・グラナダ）
手前：19世紀ギター（1840年頃・パリ）

博物館のお仕事 ～教育・普及～

博物館では教育・普及という活動をしています。これは、くだいて言うと、資料を収集・保存するだけでなく、これらを用いてもっと皆さんにとり為になりかつおもしろそうなことをしていこう、ということです。

浜松市楽器博物館では定期・不定期でさまざまな活動を行っています。例えば、皆さんに御覧いただいている常設展示では、各展示台に1台ずつ音楽を聴くことができる装置が付いています。しかし、もう一步踏み込んだサービスをということで、毎日6回、鍵盤楽器(ハープシコードやフォルテピアノなど)の解説付きの生演奏を聴いていただいています。また、毎月第3日曜日には、展示品以外の楽器や楽器の周辺文化を演奏付きで紹介する「ミュージアムサロン」を、それ以外の毎週日曜日は展示品解説「展示室ガイドツアー」を行っています。

当館ではこれまでに次のような教育・普及活動を行ってきました。

展示(常設展示、特別展示、企画展示、小展示)、パソコン楽器ミュージアム、展示品解説、展示品演奏、講座、講演会調査報告会、レクチャーコンサート、楽器製作所見学会、楽器作りワークショップ、調査学習支援、職業体験支援、出張講師、各種出版活動(図録・博物館だより・CD・調査報告書)

しかし、博物館を皆さんにとって身近なものとしてよりよく活用していただくには、博物館をもっとよく知っていただかなければなりません。博物館とその活動内容の宣伝も合わせて行う必要があります。(K.O)



ミュージアムサロン「アフリカの音」

♪ 博物館日誌

11/7, 14, 28	展示室ガイドツアー	1/23	報告会「浜松楽器風土記」
11/21	ミュージアムサロン「文字の楽譜」	1/27～2/20	新着資料展
12/5, 12, 26	展示室ガイドツアー	2/6, 13, 27	展示室ガイドツアー
12/19	ミュージアムサロン「小鼓まるはだか」	2/20	ミュージアムサロン「アフリカのさやき『カリンバ』」
1/2, 9, 23, 30	展示室ガイドツアー	2/26	報告会「三遠南信芸能調査中間報告」
1/2	ミュージアムサロン「新春の調べ」	3/5, 12, 26	展示室ガイドツアー
1/16	ミュージアムサロン「小鼓まるはだか」	3/19	ミュージアムサロン「南米のハープ『アルパ』」
12/4～1/21	海外フィールドワーク速報展		

♪ お知らせ

展示替えをしました。新しくチューニングハンマーとヴァイオリンの製造工程の展示をご覧になれます。また、展示室音源プースの楽器名・曲名等については、新しく点字表示を加えました。

〈今後の催し物〉

3/25(土)～5/7(日) 第7回特別展「メキシコ・グアテマラ楽器紀行」

◆11月～1月の入館者数

大人	10,148人
中人	211人
小人	2,164人
幼児	834人
合計	13,357人

利 用 案 内

開館時間：火曜日～日曜日 午前9：30～午後5：00
 休館日：月曜日(祝日にあたる時は開館)、祝日の翌日、
 12/29～1/1、館内整理日3/29、4/26、5/31、6/28
 常設展観覧料：個人 団体(20人以上) 団体(80人以上)
 大人(大学生以上) 400円 320円 240円
 中人(高校生) 200円 160円 120円
 小人(小・中学生) 100円 80円 60円
 ※館内には、貴重品以外のお荷物は持ち込みできません。

浜松市楽器博物館だより

2000年3月30日発行

No.19

編集 浜松市楽器博物館
〒430-7790 静岡県浜松市板屋町108-1

TEL. 053-451-1128

FAX. 053-451-1129

http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/gakki/
gaku@gakki.city.hamamatsu.shizuoka.jp

印刷 株式会社シバプリント